

日系アメリカ人の文学活動におけるバイリンガリズム ——強制収容と国家への忠誠・言語・アイデンティティ——

水野真理子

はじめに

近年、「越境」というキーワードによって、国家の名称を冠した、例えば「日本文学」「アメリカ文学」の範疇だけにおさまりきれない優れた作品が顕著に見られるようになり、それらに対する関心も高まっている¹⁾。「越境」の文学、「越境者」の文学にはさまざまなかたちがあるが、本論で取り上げようとする「日系アメリカ文学」も、例えば一世世代の作家が日本語でアメリカに住む日本人読者に向けて書く、そしてその作品が日本でも読まれるというように、また詩人野口米次郎（1893年渡米、1904年帰国）が英語で作品を生み出し、アメリカやイギリスで認められるなど、作家の出自、使用言語、発表の場、作品に描かれる世界が同一の国に属するものでない特徴を持った作品がみられ、「越境」の文学とひとまず呼ぶことができよう。

こうした「越境」「越境者」の文学では、少なくとも二つの国家の言語とそれに付随する作家のアイデンティティや文化的背景が深い意味を持つことになる。例えば比較文学研究の西成彦は、ドイツ語で作品を書く日本人作家多和田葉子と日本語で作品を書く在日朝鮮人作家李恢成を比較し、二つのバイリンガリズムという定義を試みている。多和田の場合は、「『唯一の母語』という確固たる土台」の上で、足し算的に新たに外国語を習得するという形を取り、その一方、李の場合は、日本の朝鮮支配により習得せざるを得なかった日本語で作品を書くということは、自身の意思を越えたところで、「母語」である韓国語が引き裂かれていくような経験を伴うものであるという。前者を「足し算（アディション）されたバイリンガリズム」、後者を「割り算（ディヴィジョン）されたバイリンガリズム」と定義している²⁾。

バイリンガリズムという語そのものの定義についてはより詳細な議論が必要ではあるが、ここでは西の定義を一つの指標として、二つの言語の使用や選択に関わる問題という具合に広く捉えておきたい。そうすると、バイリンガリズムを含む日系アメリカ人の言語経験については、それを概略的に捉えれば、一世世代の主要言語は日本語、二世世代は英語という基本的な線引きがある。そこに、アメリカに生まれ、日本で教育を受け、またアメリカに戻ってきた帰米二世の状況もある。彼らも日本語を主要言語とする場合が多い。さらに、一世でも英語が堪能な者、二世でも日本語に習熟した者、会話については万能な者、そして帰米二世でも双方の言語にたけている者、また英語の読み書きは可能であるが、日本語の方が母語として主である者など、言語使用のあり方は細部を見れば様々である。

こうした各自の言語的背景を持っている日系アメリカ人（ここでは特に一世と二世）の作家・文芸人の文学活動を概観してみると、日本語による文学活動と英語による文学活動はいくらか

の交わりを持ちながらも別々の流れとして存在してきた。主に西海岸地方を中心にみると、一世世代は渡米した1880年代当初から現地の日本語新聞を主要な発表の場として、俳句、短歌や短編小説などを創作し、その動きは次第に多くの作者、読者、そしてグループを得て1920年代頃には「移民地芸」の確立を求めるほどに広がっていった。1920年代半ば頃からは、呼び寄せ一世や帰米二世たちも日本語文学活動の新たな担い手として加わり始め、1930年代には西海岸地方のみならず、中西部、東部、ハワイなどの作家との連携もわずかながら持つような文芸雑誌も生み出されることになった。その一方、二世による英語の文学活動は、1920年代半ばに、各日本語新聞が二世のための英語欄を設けたことから開始する。多くの二世文芸人たちは、日本語新聞の英語欄に作品を投稿し、また二世たち独自の文芸雑誌も1930年代になると生み出されるようになった。またこの時期は、一世から二世への世代交代期のはじまりということもあり、両者の言語的乖離を埋めるべく、日本語による文学活動と英語による文学活動の交流も少なからず模索された。このように日本語と英語の文学活動の二つの流れが基本的に存在し、しかしまだ日本語文学の成熟度の方が高く、二世の英語文学はこれから発展していこうとする細い流れであり、両者が、特に二世の方が、どのような立場で作品を作り上げていくのかを探し求めていたのが1930年代の文学活動であった。

そうした状況に大きな影響を与え、その後の文学活動の方向性を定めていく要因となったのが、日系人の強制収容であった。相敵対する国家への忠誠・不忠誠が問われた強制収容期には、どの言語で何を表現するのか、どのような立場で生きていくのかという選択が、喫緊の問題として作家や文芸人を含む被収容者たちにつきつけられた。先の西による定義でも、特に李恢成の場合のように、国家間の関係、特に20世紀の植民地支配とその帰結としての第二次世界大戦、そして太平洋戦争が、人間の言語使用に与える影響が大きいことがうかがえる。日系アメリカ人にとっても同様に、太平洋戦争と日系人強制収容という事態が、彼らの言語に対する向き合い方に大きな揺さぶりをかけることになった。そこで、本論文では、1942年から1945年までの日系人強制収容期における日系アメリカ人の文学活動を対象として、英語と日本語という二つの言語とそれに伴う自己のまたは他者のアイデンティティに文芸人たちがどのように向き合ったのかを探ってみたい。

1. トパーズ収容所における文学活動—アメリカ化政策の下で

1-1. 『トレック』『オールアボード』

中西部に設けられた十カ所の強制収容所では、一世、二世世代ともに文芸・文学に関心のある者たちが、新聞や雑誌を作り、またある者は図書室を設けることに尽力するなど、文学活動を行っていた。ネヴァダ州との境界近くにあったカリフォルニア州のマンザナー収容所、アリゾナ州のポストン収容所、ユタ州のトパーズ収容所での活動が顕著なものとして挙げられるが、特にトパーズ収容所での文学活動が、最も盛んであったと考えられる³⁾。そこでは、戦前、1930年代から日系社会で活躍していた二世文芸人たちが多く収容されていた。日系社会のみならず、アメリカの主流社会においても認知されるのに最も近い場所にいた二世作家のトシオ・モリ (Toshio Mori)、また二世の文芸人の間で中心的な存在の一人だったトヨ・スエモト (Toyo

Suyemoto) もトパーズ収容所で創作活動を続けていた。こうした点から、ここではトパーズ収容所に着目してみたい。

まずトパーズ収容所の概要を記しておこう。トパーズ収容所はユタ州のソルトレイクシティから140マイル（約225キロ）南の方角にあるミラード郡（Millard County）に建設された。1942年9月11日に開所し、1945年10月31日に閉鎖された。ピーク時の収容人数は8,130人で、収容された人々の多くはカリフォルニア州のアラミダ、サンフランシスコ、サンマテオ地域出身者であった。ほとんどの人々がカリフォルニア州のタンフォラン（Tanforan）仮収容所に送られたのちに収容されている。忠誠登録では、アメリカへの忠誠について問う28番目の質問に89.4パーセントの約9割が「イエス」と答えた。ただ、登録の際、忠誠質問に答える前に彼らの権利の回復がなされるべきであると主張する運動も起こっている⁴⁾。

収容所内での出版物に関しては、新聞『トパーズタイムズ』（*Topaz Times*）が開所間もない1942年9月17日から、収容された日系人によって発行され、1945年8月31日まで続いた。1942年10月29日からは日本語版とともに発行されている。この新聞の他に、二世の英語雑誌『トレック』（*Trek*）と『オールアボード』（*All Aboard*）が発行された。『トレック』は二世のジム・ヤマダ（Jim Yamada）、タロウ・カタヤマ（Taro Katayama）、ミネ・オオクボ（Mine Okubo）らが中心的編集者となり1942年12月号、1943年2月号、6月号と、第1巻第1号から3号まで発行された。中心的編集者たちが、入隊や再定住のために収容所を後にしたので、『トレック』終刊のあとを引き継ぐかたちでトシオ・モリ、イブリン・キリムラ（Evelyn Kirimura）らが『オールアボード』を1944年4月号の1号のみ発行した。

『トレック』『オールアボード』には、全体的に強制収容政策を支持し、戦時転住局（War Relocation Authority, 以下WRAと記す）の方針に従う記事や作品が多く見受けられる。編集者の一人、ミネ・オオクボは、『トレック』を「芸術と文芸の雑誌」（art and literary magazine）と称していたが、純粋な芸術、文芸誌というより、収容所内の様子を伝え、再定住に向けての知識を与えるという情報誌的な側面が色濃く表れている⁵⁾。それは『トレック』が、WRAの中に設けられた「情報部」（the Reports Division）の管轄下にあったことと大いに関わっている。また『オールアボード』も同様に情報部のもとで発行され、内容の傾向も『トレック』とほぼ同じである⁶⁾。

こうした発行の背景に加えて、収容所でのアメリカ化政策も少なからず編集者、寄稿者たちに影響を与えたと考えられる。島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（1995）によれば、WRAは収容所を「モデル・コミュニティ」とし、被収容者の日系人にアメリカの民主主義を教育し、「アメリカ化」することで、強制収容がはらむ矛盾、すなわち合衆国憲法の掲げる民主主義の理念とは相反する側面を解消しようとしたという。その意図は、WRAが作り上げた「モデル・コミュニティ」構想と、それに基づく収容所内の学校教育、被収容者による所内での自治、また経済活動の実施に表れていた⁷⁾。具体的には、1942年末に各収容所で小学校とハイスクール（中学と高校を含む）が開校された。また日系人による自治、自己管理を認め、選挙を行って議員を選出し、参事会と呼ばれる議会また各委員会などが設けられた。収容所内での経済活動としては、医師、看護師、教師、警備、警察、食堂の調理、給仕、また外部への農作業など、被収容者はさまざまな職業に就いていくらかの収入を得ることができるようし、所内での自治運

営を推進した。また労働組合の発足、自給自足を目指した野菜の生産も奨励された⁸⁾。

トパーズでもブロック単位で、管理局側からの連絡の任務にあたるブロックマネージャーや、市参事会議員が選出されている。また教育については、保育園と幼稚園が合わせて三施設、小学校が二校、高校が一枚、設置された。そこではWRAから派遣された白人教師の他に、日系人教師も働いていた。成人教育(Adult Education)プログラムが成人教育部より提供され、美術、音楽、裁縫、生け花、手芸教室のような趣味的な講座の他、数学、英語、スピーチ、時事問題解説の講義、さらにアメリカの地理や歴史を教授する「米国研究講座」もあった⁹⁾。

以上のような民主主義の教え込みと、所内の円滑な管理を主眼とするアメリカ化政策は、数々の矛盾や問題を露呈し、必ずしも全て成功したとは言えないものだった。しかし、日本人、日系人たち各自の収容所での生活に様々な局面で関わり、彼らのアメリカに対する忠誠心、民主主義についての認識、自身の帰属意識などには、少なからず影響を与えたと推測される。

1-2. 強制収容、アメリカ化政策への支持—トシオ・モリ「子供たちよ」

先にも言及したように、『トレック』『オールアボード』には一見したところ、強制収容やアメリカ化政策を支持している記事が多く見受けられる。トシオ・モリが短編「つり目のアメリカ人」(“Slant-Eyed Americans”)でも描いたように、真珠湾攻撃が起こったとき、一世たちは市民権がないため敵性外国人として扱われることは想像されたが、アメリカ生まれの二世たちについては、アメリカが憲法で規定しているように、彼らが敵として扱われたり、住居や財産が脅かされるということは、考えられない、もしくは考えたくない処遇であった¹⁰⁾。しかし、実際には二世も収容されてしまった。こうした決断を下したアメリカ政府に対する失望感や悔しさのような感情は、表面的には全くと言ってよいほど影をひそめている。収容所が静かで平穏であることが強調され、また学校教育、特に一世や帰米二世向けの「成人教育」について説明されている記事もいくつかある。

二世はもともとアメリカ人としてアメリカ文化の中で成長してきたので、彼ら・彼女らがアメリカを支持しようとするのは、ある意味当然の選択である。しかし、『トレック』『オールアボード』においては、新たな決断を伴うかたちで、二世たちが支持し直したという様相がうかがえる。その一人の例として、まずトシオ・モリを挙げてみたい。

モリは、1930年代から積極的に短編小説を書き、日系二世たちの文芸雑誌のみならず、西海岸を中心とする若手作家たちによる文芸誌『コースト』(Coast)などにも発表し、アメリカ主流社会でも認知されるのに最も近い場所にいた作家であった。『トレック』1943年2月号には、モリの短編小説「子供たちよ」(“Tomorrow Is Coming, Children”)が掲載されている。この号の1頁目に、本号は当初は二月末に発行予定であったが、「WRAと陸軍省による登録の期間に」(during the recent WRA and War Department registration)、こなさなければならなかった他の職務のため、発行が遅れ、実際の発行月と「2月号」が合致していないことを読者にわびる文章が載せられている¹¹⁾。「登録」とは忠誠登録のことを指しているのだろう。また、『トパーズ新聞』によるとトパーズ収容所では登録は1943年2月11日頃から25日の間に行われたようであることから、この号は忠誠登録終了後の3月に発行されたと考えられる¹²⁾。したがって、作品自体は忠誠登録実施の前か最中に書かれ、また雑誌の編集はそれが実施されることを意識しながら、あ

るいは実施中の様子を見守りながら進められたと推測される。

ここで、忠誠登録 (loyalty questions) について概要を確認しておきたい。忠誠登録は、1943年2月頃から全ての収容所で実施された¹³⁾。当時、日系アメリカ二世のみによる戦闘部隊の編成が計画されており、17歳の徴兵年齢に達した二世男子に対して、軍隊に入隊する意志があるかどうかを問うために、また同時に、二世の女子全員と一世男女に対しては、出所許可を与えられるかを見定めるために、アメリカに忠誠か否かを問う目的で調査が行われることになった。前者は「日本人の祖先を持つアメリカ市民の声明」(Statement of United States Citizenship of Japanese Ancestry)と題する質問票で、後者は「戦時転住局仮出所許可申請書」(Application for Leave Clearance)と題する質問票であった。

この忠誠登録は、被収容者たちを混乱させる失策であったと言われている。その主な原因は、様々な立場にある日本人・日系人たちを、忠誠か不忠誠かの二者択一で二分しようとしたことである。特に問題となったのは、従軍の意思があるかを問う(二世男子の場合)、または進んで戦争協力を行うかを問う(二世女子、一世男女の場合)第27問、そしてアメリカへの忠誠を誓い、日本に対する忠誠を拒否するかどうかを問う第28問であった¹⁴⁾。

先述したように、二世たちは、敵性外国人とされアメリカ市民としての権利を踏みにじられたうえに収容所に送り込まれた。それにも関わらず、アメリカへの忠誠を問われ、軍隊に応じるかどうかの選択を迫られて、彼らはさらなる憤りを感じざるを得なかった。また、一世は、帰化不能外国人とされ、法律上は日本人であったために、もしアメリカへの忠誠を選択し日本に対する忠誠を否定すれば、自分たちが無国籍者になってしまうという懸念もあった。さらに、一世と二世の間で意見が分かれ、家族間に亀裂が生じ、家族が離れ離れになることを避けるために、本意ではない回答を選ぶ場合もあった。このように、忠誠登録は日本人・日系人たちにとって、不条理なものでありながら突きつけられ、選択を強いられたものだった。

モリの短編小説「子供たちよ」には、こうした忠誠登録を意識していると思わせる記述が見られる。話の筋は、一世の祖母が三世の二人の孫アナベルとジョニーに、自身の渡米後の人生について語り聞かせるというものである。この中では、終始、祖母がアメリカで生きていく覚悟をもう決めていることが強調されている。写真花嫁として、または呼び寄せられて渡米した彼女は、人種差別や貧困に耐えながらも、夫とともにアメリカで何とか生計を立ててきた。日本にいる姉妹が、彼女に戻ってくるよう懇願したこともあったが、彼女は帰らなかった。彼女は自分はアメリカに属しているのであり、アメリカで生きていく決意だと孫たちに告げる。その決心を後押ししたのは、戦争であった。

Ah, war is terrifying. It upsets personal life and hopes. But war has its good points too.

In what way, Johnny? Well, you learn your lessons quickly during wartimes. You become positive. You cannot sit on the fence, you must choose sides. War has given your grandma an opportunity to find where her heart lay. To her surprise, her choice had been made long ago, and no war will sway her a bit. For grandma the sky is clear. The sun is shining.¹⁵⁾

「曖昧な態度ではなく、どちらかを選ばなければいけない」という祖母の言葉には、忠誠登録と

いう状況を考慮すると、看過できない強い意図が込められているように思われる。忠誠登録を前にすれば、一世たちはどちらの側につくか選択しなければならなかった。実際にモリが描いたような言葉を発した一世たちがいたのかどうかは、ここでは確かめることができないが、重要なのは、モリがこのような決心をする一世女性の姿を描いたという点である。ここには、日本的な文化、日本に対する精神的結びつきの深い一世たちも、もはやアメリカ人であること、アメリカ人として生きる道しかないことを再確認しようとする意図がうかがえないだろうか。

さらにこの小説は、マリー・キョウゴクによって、日本語に翻訳され、この号の最終ページに掲載されている。こうした翻訳はこの作品ただ一つであり、他の『トレック』『オールアボード』の作品には見られない。一世がこの小説を読んだかどうか、明確なことは言えないが、あえて日本語訳を載せるということは、日本語使用者にも読んでもらいたいという希望があったからだと考えられる。この作品が、忠誠登録で「イエス、イエス」を選択することを勧める、もしくはその選択が正しいのだと確認するという意図を含むものであったとすれば、モリ自身のあるいは訳者であるキョウゴク他編者の二世たちの、アメリカへの忠誠に対する決意が感じられよう。また、モリの戦前までの作品には、一世世代の日常にみられる日本的な文化や伝統、また一世と二世との文化的、世代的乖離、そこから生じる一世の寂しさや望郷の思いなどをあたたかいまなざしで描写する短編が多い。そうした作品の持つ特徴の違いから考慮しても、「子供たちよ」には戦時下であることを意識して、あえてアメリカへの忠誠を示そうとするモリの意思が感じ取られる。

1-3. トヨ・スエモトのアメリカ化に対する見方

モリの他にも自分たちの忠誠心や帰属を再確認したいという心情がうかがえる作品を書いた文芸人もいる。それはトヨ・スエモト (Toyo Suyemoto) である。彼女は、1930年代から積極的に詩を書き、新聞の文芸欄や二世の雑誌に投稿してきた女性詩人である。スエモトは、『オールアボード』にエッセイ「ミスター、ミセス一世」(“Mr and Mrs Issei”)を寄稿している¹⁶⁾。彼女は日本人の両親、二世の兄弟姉妹とともにトパーズに収容されていた。昼間は高校生に英語とラテン語を、夜間には一世、婦米二世に英語を教授していたようだが、その経験からこの作品は書かれている。

彼女の主張の中で興味深いのは、言語とアメリカ化 (Americanization) についてである。戦前一世も二世も白人社会からは分離されてきたが、その主要な理由は、日本人・日系人たちがアメリカ主流社会にうまく同化できなかったことだという。特にその障害となったのは、一世たちが英語をうまく話せなかったということだ。一世は日本語とは全く異なる英語という言語を学びたいとは思っていたが、家族を養う責任に追われ、語学学校に行くことなどできなかった。その結果、主流社会に溶け込んでいくことが困難になり、またアメリカ育ちの二世との間にも齟齬が生まれたと説明する。そうした観点から、現在、収容所で一世、婦米二世が英語を学ぶことはアメリカ化にとって重要であると主張する。また、彼女の目に映る一世たちは、英語授業を喜んで受講しており、再定住の準備としてアメリカの地理、職業訓練に関する授業、アメリカの歴史や発展についての授業、アメリカ的生活についての授業が好評であると報告する。こうした大人向けの授業については、マリー・キョウゴクも同様に「成人教育」(“Adult

Education”) で報告しており、彼女も英語授業や、再定住に向けての授業の人気の高さとは有益さを指摘している¹⁷⁾。実際に、『トパーズタイムズ』に掲載されている「成人教育付録」の欄（アメリカの歴史、米国研究プログラムの日程、日常英会話などの紹介）には、「みなさんが成人教育欄を出して下さるのを感謝してをります。ことにお行儀や英語を教へて下さるので大変助かります。」という、一世と思われる読者からの好意的な意見が「読者の声」として載せられている¹⁸⁾。わずかな記述であるが、前向きに成人教育を受講し役立てようとする一世たちがいたことが想像される。

「ミスター、ミセス一世」に描かれた一世の姿は、誇張されたものではなく実際の姿であったかもしれないが、アメリカ化については、彼女は戦前、1930年代半ばから後半にかけて、このエッセイとは異なる捉え方をしていた。それは、エッセイ「夜明けの約束—活気と笑いに満ちて—」(“The Promise of an Early Dawn…:Vibrant and Laughing”) に表れており、そこでは日本の文化的伝統も重視する姿勢を示している¹⁹⁾。この文章の主眼は、二世の文芸の良さが何かを指摘することだが、それについて、興味深いことに、思考や言語的表現（主に英語）において獲得されたアメリカニズム（アメリカ的価値観）によるのではなく、学ぶという過程での日本的な遺産（日本の文化的伝統に基づいた学びの過程）から得た、視覚的表現や言葉が持つ音声面に依存していると説明する。1930年代半ばから、二世文芸人たちの間で、一世とは異なる二世独自の文学、文化が存在することを示そうとする動きがあった。主流社会から日本人としてみなされ、人種的差別を受けることも多かった二世たちは、自分たちが多民族国家の一員としてのアメリカ人であること、アメリカ的価値観を持っていることを、文芸、スポーツ、音楽など様々な文化的活動によって示そうとした。こうした動きの中で、彼女はそこに一石を投じ、日本の文化的伝統も軽視すべきではないと考えていたようだ。今挙げた彼女の主張は、二世の文芸の良さについて述べているもので、先に示したような一世とアメリカ化について言及しているのではないが、「ミスター、ミセス一世」での彼女のアメリカ化支持の姿勢は、1930年代の彼女のアメリカ化に対する捉え方と異なる様相を呈している。したがって、スエモトの「ミスター、ミセス一世」には、モリと同様の、戦時下という状況に現実主義的に対応すること、一世も、日本とアメリカの間の曖昧な存在ではなく、アメリカ人として生きていくべきだという意思が示されているように思われる。

その一方で、やはりスエモト自身が抑えていた感情、アメリカの収容政策に対する失望や批判意識は、抑制されたかたちで表現されてもいた。例えば、彼女は次のような詩を書いている。

“Hokku”	「発句」
The geese flew over	雁たちが空を越えていった
At dusk—I shivered, not with	夕暮れの中を—私は震えた
Cold, but sense of loss,	寒さのせいじゃなく 喪失感から
Where do the geese go?	雁たちはどこへ行くの？
Can they escape from autumn	秋から逃れて
And return to spring?	春に戻って来られるの？

Let me follow them:

The birds know better than I

Which way leads to spring.²⁰⁾

一緒に行かせて

鳥たちのほうがよく知っている

どの道が春に続くかを

(日本語訳 筆者)

これは、強制収容という文脈の外で解釈するならば、秋のもの悲しさや、困難な状況に置かれた中で希望を求める心情を表現していると、一見捉えられそうである。この詩をスエモトがいつ書いたかは明確には言えないが、先行研究でも指摘されてきたように、これは収容所での感慨であり、収容政策に対する批判意識が表明されているとみるのが自然であろう²¹⁾。日本語の音声的特徴を取り入れている点（英詩の音節の数が五・七・五）には、彼女が自伝でも語っているように、母から短歌や俳句などを教わったその影響がみられる²²⁾。また先に示した二世文学の長所を指摘したエッセイの記述との関連性も思わせる。さらに興味深いのは、この詩が「ミスター、ミセス一世」の紙面中央に小さく掲載されているという点である。まるで、収容所政策やアメリカ化を支持する無難なエッセイの間に、隠されたような形で、収容政策に対する憤りや失望感が表明されているようである。配置を担当した編者の配慮によるものかもしれない。こうした点から、スエモトを含む二世たちの、収容政策に対する複雑な心境と難しい立場が浮かび上がる。

1-4. 日本語文学に表れる一世たちの心情

モリやスエモトの一世描写からは、アメリカで生きる決心をし、英語を積極的に学んでいこうとする姿が浮かぶが、一世たち本人による、彼らの心の内を表現する記述や文芸はないだろうか。トパズ収容所における日本語雑誌の存在は確認していないが、篠田左多江によれば、トパズ短歌会、トパズ吟社（俳句）、トパズ川柳社、そして自由律俳句のポピイの会があったという。また日本語版『トパズ新聞』に、それらの会の作品が1944年1月からおよそ毎月一回設けられた文芸欄に掲載されている²³⁾。ここには、収容政策や祖国日本に対する、表立っては言明できないような心情が表現されている。

例えば、1944年1月1日、「新年号付録 文芸欄」には、「トパズ吟社句抄（ホトトギス派）」の句と「トパズ短歌会 第二回詠草」からの短歌が掲載されている。短歌については次のような歌が載っている。「何事も試練と思ひ収容所の足らはぬ暮しに堪えてありけり」（福井萬可）と厳しい収容所の生活を詠う作、また、「はてしなく祖国懐ふ日はおのづから行進曲をくちづさび居り」（高山要造）、「東海の瑞穂の国のその民性を人よ正しく視よと叫ばむ」（塩澤徹四郎）、「住む国の法を守り慎めどやまと男の子にひゞくものあり」（塩澤徹四郎）と公言することをはばかれる祖国日本への愛国心を表現した歌もある。また愛する家族からの手紙とその日本語に思いを馳せる歌、「その文字は僅かなれども待ち詫びし故国の便りは涙してよむ」（川口幹造）もある。アメリカに定住していくことを決心しながらも、収容に対する不満、祖国日本や家族への思いは当然心を占めており、それを心の奥底へ押し込んではいるが、こうした短詩形文学のかたちで、ひっそりと表現することで、自分たちの心を静め、支えていたのかもしれない。

また、トパーズ以外の収容所ではいくつか文芸雑誌が発行されている。広範囲な書き手と読者を得ていたものは、『ポストン文藝』（1943年2月～1945年9月、26か27冊発行）と『ハートマウンテン文藝』（1944年1月～1944年9月）だったようである。例えば『ポストン文藝』には日本への郷愁、日本人の道德観、開拓者としての一世の回顧、日本敗戦のニュースを聞いての衝撃、悲痛などが、詩、短歌、俳句、短編小説、随筆などで表現されている²⁴⁾。

これらの例から判断すると、収容所では日本語が完全に禁止されたわけではなかった。しかし、アメリカで生きていくためには、英語を習得しなければいけないことを再認識させられる状況であったことには変わりない。そうした立場において、一世たちにとっての慰めや安らぎを得られるのが日本語による文学活動だったと考えられる。

2. トゥーリレイク隔離収容所での文学活動—日本語、日本的文化の中で

2-1. 文芸雑誌『鉄柵』

次に、トパーズ収容所における雑誌『トレック』『オールアボード』と対照的に、トゥーリレイク隔離収容所での文学活動について、文芸雑誌『鉄柵』を中心にみてみたい。この雑誌を主軸に据えた文学活動には、トパーズ収容所での二世たちの執筆活動とは異なる側面が見受けられる。それはトゥーリレイク隔離収容所の性格と大に関わっている。

トゥーリレイク収容所は、カリフォルニア州の北、オレゴン州との境界近くのクラマスフォールズ盆地（Klamath Falls Basin）に建設され、1942年3月に開所した²⁵⁾。重要な点は、ここが1943年2月から3月にかけての忠誠登録の結果、不忠誠選択者の隔離収容所施設（Tule Lake Segregation Center）に指定されたという点である。登録の結果、登録を拒否したり、アメリカへの忠誠を問う質問に「ノー」と答えた者が40パーセントとなり、全収容所でその割合は最も高くなった²⁶⁾。また軍隊志願者も0.5パーセントと最も低い数字であった²⁷⁾。こうした結果から、不忠誠者の隔離収容所施設に指定されることになる。その後、1943年夏から秋にかけて忠誠を選択した者が出所、また他の収容所から不忠誠選択者がトゥーリレイク収容所へと移動した。そして終戦後の1946年3月、他の収容所の中で最も遅く閉所した。

隔離収容所になったということは、日本支持者や、日本への送還を希望した者がここに集められたということでもあった。また、管理局がトラブルメーカーだとみなした者たちもここに送られた。したがって、この収容所は他の収容所に比べて、暴動や混乱が多かったと言われている²⁸⁾。例えば、アメリカに対する反発心を強く持っていた一部の過激な帰米二世のグループが、所内の農園でストライキを起し管理局と対立を深めた。さらに、1944年7月、二世の市民権放棄を認める法案（帰化法修正案公法405号）が通過した後、帰米二世を中心とする「祖国研究青年団」、一世を中心とする「帰国奉仕団」、帰米二世の「報国青年団」など親日派の過激的な組織ができ、日本精神や日本の勝利を唱道して、早朝から軍隊式のデモ行進などを行った。またこのような人々の圧力で、市民権放棄運動が起こる。そこでは、日本帰国を決めかねている人々に、精神的圧力をかけてアメリカの市民権放棄を迫ることもみられた。こうして、トゥーリレイク収容所では市民権を放棄した人数が全収容所の中で最多となった²⁹⁾。

このような緊張と異様な雰囲気が漂う中で、文芸人たちは『鉄柵』を創刊することになる³⁰⁾。

創刊に関わったのは、呼び寄せ一世の詩人加川文一、帰米二世の山城正雄、野沢譲二、河合一夫であった。帰米二世の三人はハイスクールの同級生で文学に関心を寄せていた。強い愛国心を表明する人々と所内の雰囲気と違和感を抱いていた彼らは、そうした悶々とした心情を打ち明けられる場を求めていたという。そこに、1930年代頃から実力者として文芸人たちの間で認められていた詩人加川と妻が、マンザナー収容所から移ってきたことを知り、彼のもとに集まり文学談義を楽しむようになった。そのうちに同人雑誌の発行へと話が進んだという。そしてトゥーリレイク収容所が隔離施設になった後の1944年3月に『鉄柵』を創刊した。二カ月に一度発行され、最終号は1945年7月の第9号であり、全部で9冊発行されている。

『鉄柵』は詩人の加川が指導者としての役割を果たしていたこともあり、作品の質の高い純粋な文芸誌であった。そこには、どんな事情であれ、不忠誠を選択してトゥーリレイク隔離収容所にやって来た文芸人たちの、収容という事態に真摯に向き合おうとする姿勢とそれに伴う迷いや葛藤が表れている。そして、彼らはいずれ日本へ帰国することをかなり現実的な問題として想定していたようだった。加川は、創刊号「発刊の辞」で、「私たちの文藝はこの自分たちの文化の一形態として存在しつつ、今移民地に最後の花を咲かせてあるとも見られるであろう。」と述べたり、収容所生活で文学活動を行う理由は「私たちが来たるべき戦後の新生活に踏みいるに際して整へてゐなくてはならぬ用意の具体的な証しを自分たちの力でもやしつゝけてゐなければならぬ点」であると記している³¹⁾。ここから、世の中の動きから取り残されている自分たちにできるのは、戦後に待っている日本での暮らしに、心身ともに備えていることだと認識していた様子がうかがえる。

日本への帰国を予測し、そのための準備をするということは、「在米日本人」や「日系市民」と称された人々が、日本の「日本人」になろうとする過程を辿ろうとしているとも捉えられよう。トパーズではアメリカへ再定住していくために、アメリカ化政策がとられていたが、トゥーリレイクにはそれとは逆に日本人になろうとする「日本人化」「日本化」と呼べるような状況が存在し、意識的であれ無意識的であれ、文芸人たちはそれを経験していたのではないかと考えられる。こうした状況を念頭に置きつつ、以下に『鉄柵』に掲載された作品を取り上げてみよう。

2-2. 「綴り方教室」に掲載の日本語作文—日本語を選択する二世

トパーズ収容所で一世たちが英語を学んでいたのと対照的に、トゥーリレイク隔離収容所では、まだ10代程の主に純二世が、帰国に備えて、所内の国民学校で日本語を学んでいた。それを励ましたいという気持ちから、「綴り方教室」欄が『鉄柵』に設けられている。この設置の意図を編集者は次のように説明する。

ツールレーキに住む純二世の若人は勉強してゐる。英語を勉強し、日本語学校へ行き、傍ら新設された図書館に通って日本語の小説を読んでゐる。私たちはこれらの若人に対して無関心でありたくない。援助してやりたい。日本を実際に知らないこれらの人たちが日本語の小説を読んで何を感じ、何を心得るか、興味あることであり、私達は彼等から、私たちの気付かない、いろゝなものを教はるのである³²⁾。

国民学校は1943年11月に創設、8校設けられ、教師が各校に15、6名おり、日本の教育に準じて初等、中等教育を行ったという。アメリカ政府が設けた公立学校とは異なり、収容者の資金によって独自に運営された。山城もこの国民学校で教鞭をとっていたようだ。国民学校を援助する組織として「中央日本教育会」も結成されており、「綴り方教室」や「作文欄」の作品は、この中央日本教育会が発行した作文集から抜粋したものだという³³⁾。

この「綴り方教室」欄に掲載された作文から、トパーズ収容所と対照的な書き手の様子がかがえる。「今の私」と題する、国民学校六年生の松野薫による作文は、「私達は此のキャンプに何の為に来たのでせうか。」と始めて、収容所に来た意味を問うている³⁴⁾。彼女は、「勿論日本へ行くのが私の目的です。」と記すが、実は日本に行ったこともなく、日本がどのような国なのかは、大人が教えてくれることしか知らない。ヒラリヴァー収容所から忠誠登録後に、トゥーリレイク隔離収容所に来たようだが、そのときの友達との別れは辛かったという。しかし、今の自分は以前の自分とは異なっている。「何時も鏡の前に立つて自分の姿を見る時に、私も本当の日本人だと云ふ気持ちがします。いゝえ、顔や姿だけが日本人でなく私の心のすべてが日本人らしくなっています。」との記述からは、自分の日本人らしさを懸命に確認しようとする様子が見て取れる。彼女はおそらく二世で、国籍も文化的、言語的にも、「日本人」ではなかったはずである。しかし、家族との話し合いの結果からか、不忠誠を選択して、これから日本人になろうと努力しているのであろう。その姿は、トパーズ収容所において、アメリカで生きていき、アメリカ人となることを選択する一世の姿と、正反対の方向であるが同様の態度として重なってくる。

また、次の詩は日本語と英語の間にいる二世の複雑な心境を表現している。

学校のひと時 中等科 市場美志恵

学校の窓から見ると / 春の空は白いよ / 遠い故郷の友達は / 今頃どうしてゐるんだらう / 青い眼の先生は / 日本語を知らない / 二世だつて / 私は一人ぼつちなのだ / ちつと見る高い空は / 何時も淋しいよ³⁵⁾

この詩は、本人が帰米二世か二世なのか、またこの学校を指すのかなど不明な点が多いが、彼女が確かに内面に「日本人性」と言えるものを抱えており、「青い眼の先生」や二世たちの英語世界と、自分がそれよりも親しみを抱えている日本語世界との間に、ギャップを抱き、孤独に包まれているのが感じられる。もし本人が、帰米二世で、管理局が設けた所内の公立学校で英語授業を受けているのだとすれば、遠い故郷とは日本を指し、二世との違和感を表現しているとも捉えられよう。いずれにしても、自分の内にある日本人性を再確認し、それに伴う寂しさや疎外感をこの詩は表現している。こうした心の葛藤を編集者たちも共有し、それに共感したために、この詩に着目したのかもしれない。

2-3. 山城正雄の帰属意識

幼い国民学校の生徒たちと同様に、自己のアイデンティティや態度を見定めようとした文芸人として、次に山城正雄の例を挙げてみたい。山城は1916年ハワイ州カウアイ島生まれで、

1924年8歳のとき、両親の故郷沖縄へ行き、1932年16歳でハワイに帰米した。ロサンゼルスで高校を卒業し、大学の文学部で学んだ。この頃、日本語新聞に日本語の詩、短編などを数多く投稿している。太平洋戦争開始後、大学を中退、グラナダ収容所を経て、トゥーリレイク隔離収容所に移動してきた³⁶⁾。

彼は戦後、帰米二世であることの意味を問い続けているが、それは戦前からすでに始まっていた。『鉄柵』第8号掲載の随筆「脱皮の期間」には次のように記している。

昼は野菜屋にあつて人参や大根などを売る小市民、夜は文学書と珈琲に思ひをよせる文化人、この二つの空白をつないで、電車の窓から街の赤い灯を眺めては、米国の土地に頑として根を下さなかつた内なる日本的伝統に、無限の荒涼感や感傷の若さを歌つた詩人、この三つのばらばらになった感情をもつて生きてゐた³⁷⁾。

山城は、帰米二世である自分の中に存在する言語や思考を含む、日本的な伝統が邪魔するがために、国籍に関しては二重国籍保持者としてアメリカ人でもありながら、アメリカには同化し切れない自分の状況を認識している。そして収容所という「脱皮の期間」においては、帰米二世という曖昧な存在から脱皮して本当の自分を発見したいと述べて随筆を締めくくる。

戦後の回想になるが、彼は戦争によってあるものを失ってしまったと述べており、それは、英語を勉強しなかった意欲と「アメリカ人の市民意識」であったという。大学時代には英語を学びたいという思いが強く、大学の授業で英語の小説も書いたりした。しかし、そうした熱意が、太平洋戦争とともに「潮が干くように枯渇」してしまったという³⁸⁾。こうした経験には、少なからずトゥーリレイク隔離収容所での体験が影響しているであろう。

また、不忠誠を選択した理由については、詩「火影」の後半で次のように表現している。

結局 / ツールレーキのほかに / 行く處のない私でした /
海の彼方の戦争が忘れられ勝で / ポケットの空になる淋しさもあつたが /
結局 / 歴史の流れ行く淋しい方向へ / たつた一つの
清い道を選んだ私でした³⁹⁾

不忠誠は積極的な選択ではなく、それ以外ない、仕方がない決断であったことが述べられている。不忠誠を選んだのは、日本語や日本文化のほうが、自身の身体に根付いていると感じたからだろうか。また、忠誠を選べば徴兵されるという恐れも抱いたからかもしれない⁴⁰⁾。日本人であるならば、「清い」と讃えられるはずの不忠誠の道であった。しかし、そこにはその選択が正しかったとは言い切れない迷いと言いやうのない孤独感が伴っている。

山城と同様に、自問自答と逡巡を繰り返しながら、曖昧な帰属意識から脱して、自身の立場を明確化しようとした様子を、編者の河合一夫も短編に記した。廣小路敏雄の筆名で「出発前夜」と題する作品を『鉄柵』第3号に寄せている⁴¹⁾。この小説は、河合自身を思わせる主人公の春夫が、恋人との別れを覚悟しつつも、不忠誠を選択するまでの心の葛藤を描いた作品である。民主的な思想に無意識的にも「感染されてる」自分の思想が「数年間、自己といふものを棄て、

死のやうな苦難の道に堪え忍んできた故国の人々」の思想についていけるのかという不安を抱えている。生活面でも自信はない。しかし、聴聞会の呼び出し状（おそらくトゥーリレイク隔離収容所行きを考えている者に対する聴聞会）を受け取ったときに、数日間悩み続けて見いだせなかった自分の行くべき道への回答を得たような、清々しい感情に包まれる。そして「僕も色々苦しんだが、僕の辿る道はこれより外になかつたんだ。」とその決断を、自分とは異なり忠誠を選んだと考えられる恋人に告げるのである。

河合の描く主人公春夫も、この忠誠登録を機に自身の立場を明確化しようとした。しかし、その一方、納得のいかない、抑えきれない感情も残っているのである。「遠く国を去りながらも自分の魂の中に信仰に近いほどまでに強く灼きこまれてある一つの憧のため、このアメリカに永い歳月を送りながらも、尚その土地の風習に親しめないで、転々として所を定めず時代の反逆児として流れて行く自分の宿命に堪らない哀愁を覚えるのだつた。」と書くように、本当はまだ真実の自分自身を見定めきれていないもどかしさが心に巣食っているのである。

以上みてきたように、トゥーリレイク隔離収容所は、アメリカの中にある日本語、「日本文化」の空間であり、この中で芸人たちは、迷いながらも自身の内に存在する日本人性を再認識しそれを貫いていこうとした。また二世は母語（英語）よりも優位に立っていくであろう日本語の学習の必要性を感じ、日本人になろうと努力していた。その過程は決して単純な単線的なものではなく、あちこちへとぶつかり、心に淋しさや痛みを感じながら、自身の存在のありかを求めていく過程であった。

おわりに

「越境」の文学、「越境者」の文学において、二つの言語をどのように使用するかという「バイリンガリズム」の問題を鍵として考察を進めてきたが、日系アメリカ人の文学活動において、特に強制収容所時代は、バイリンガリズムではなくむしろモノリンガリズムであることが求められた数年間であったと考えられる。国家への忠誠、不忠誠と、どの言語でどちらの国で生きていくかという選択が、一体となって二者択一的に芸人たちに迫った。そうした厳しい状況下で、その枠組みに収まりきれない、曖昧な、境界を越えた自身の帰属意識や言語文化、それらをめぐる葛藤、国家や戦争、収容政策に対して抱く感情などを作品の中で紡いでいった。

日系アメリカ人にとって収容所体験の傷痕は甚大なものであった。文学活動においてもその影響はみられ、1930年代には混在していた側面もあった英語による文学活動と日本語による文学活動は収容体験を境に明確に分離していく。戦後の二世を中心とする英語文学は、再定住期のしばらくの沈黙を破って、1970年代半ばになるとアジア系アメリカ人運動を契機に「日系アメリカ文学」として、アメリカ文学の中での一定の地位を獲得することになる。その一方、戦後の帰米二世を中心とする日本語文学は、アメリカ文化（英語）を追い求めたが届かなかった経験、不忠誠を選択したという苦い経験、収容所体験から強化された「日本人」であるという意識、そしてアメリカにいながら、日本語で日系社会の片隅の小さな読者空間に向けて作品を創作しているという後ろめたさが影響し、二世のように堂々と胸を張って「アメリカ文学」とは言えないような周辺的な存在として継続されていくことになった。

こうした二言語、二文化との関わり合いの中で作り出された日系アメリカ人の文学や文学活動は、置かれた立場の複雑さゆえに、多くの示唆を読者に与えよう。経済的側面、また国家間の関係など様々な理由で、人々の移動が絶えない現代の世界において、今後ますます「越境」「越境者」の文学は生み出されていくと考えられる。そこに立ち現われてくる言語、文化、帰属意識などの問題を考察していく上でも、日系アメリカ人の文学活動は、一つの指標となりうるかもしれない。

注

- 1) 日本語を母語としない作家による日本語文学についていえば、例えば近年ではリービ英雄、アーサー・ビナード、デビッド・ゾペティ、楊逸など多数の作家がいる。さらに在日朝鮮人作家による文学は、在日朝鮮人文学として長い歴史を持っている。日本における文学に限らず、ドイツ文学、カナダ文学などにおいても、また日系人の文学についても、国境を越えた文学に関する論考、研究書が多数出版されている。真田桂子『トランスカルチュラルリズムと移動文学』（彩流社、2006）；土屋勝彦『越境する文学』（水声社、2009）；細川周平『日系ブラジル文学Ⅰ—日本語の長い旅〔歴史〕』（みすず書房、2012）；水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて』（風間書房、2013）；日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカン移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、2014）など。
- 2) 西成彦「在日朝鮮人作家の『母語』問題—李恢成を中心に」『比較文学研究』第99号、2014。
- 3) ポストン収容所やマンザナー収容所では、二世の文芸人たちが所内の新聞に作品を発表していたが、二世による英文雑誌が発行されたのはトパーズ収容所のみのものである。篠田左多江「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動⑤トパーズ収容所」『東京家政大学研究紀要』第35集1号、1995年、1。
- 4) Brian Niiya ed., *Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1868 to the Present*, updated ed. (New York: Facts On File, 2001), 390.
- 5) Mine Okubo, *Citizen 13660* (1946; repr. Seattle and London: University of Washington Press, 1983), 134.
- 6) 例えば、『トレック』創刊号の目次には、“Trek is a special holiday publication of the Reports Division, Central Utah Relocation Project,” *Trek* (December, 1942):1, また『オールアボード』創刊号の目次には、“Historical Section, Project Reports Division” *All Aboard* (Spring, 1944):1 の記述がある。
- 7) 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（リーベル出版、1995）、58-63。
- 8) 同上、58-86。
- 9) 『トパーズタイムズ』別巻（日本図書センター、1990）、12-17。
- 10) Toshio Mori, “Slant-Eyed Americans,” Toshio Mori, *Yokohama, California* (1949; repr., Seattle and London: University of Washington Press, 1985), 128.
- 11) “To Our Readers,” *Trek* (February, 1943):1.
- 12) 『トパーズ新聞』1943年2月12、13日、25日、『トパーズタイムズ』第2巻（日本図書センター、1990）以下、『トパーズタイムズ』(*Topaz Times*)、『トパーズ新聞』（日本語版）についてはこの複製版を指す。
- 13) 忠誠登録とそれをめぐる問題に関しては、飯野正子『もう一つの日米関係史—紛争と協調の中の日系アメリカ人』（有斐閣、2000）、107-125; Niiya, *Encyclopedia of Japanese American History*, 260-261; Michi Nishiura Weglin, *Years of Infamy* (1976; repr., Seattle and London: University of Washington Press, 2003), 134-155などを参照。
- 14) Question 27: Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty, wherever ordered? (あなたは合衆国の軍隊に入隊し、命ぜられたいかなる戦闘地にも赴き任務を遂行する意思がありますか。) Question 28: Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and

- faithfully defend the United States from any or all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance or obedience to the Japanese Emperor or any other foreign government, power, or organization? (あなたはアメリカ合衆国に対し無条件の忠誠を誓い、内外のいかなる武力による攻撃からも合衆国を忠実に守り、日本国天皇あるいは他の国の政府や権力組織に対し、あらゆる形の忠誠や服従を拒否しますか。) 質問 27, 28 の英文は Paul Spickard, *Japanese Americans: The Formations and Transformations of an Ethnic Group*, rev.ed. (New Brunswick: Rutgers University Press, 2009), 128 を、訳文は竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償請求運動による変遷』(東京大学出版会, 1994), 110 を参照。
- 15) Toshio Mori, "Tomorrow Is Coming, Children," *Trek* (February 1943):16.
- 16) Toyo Suyemoto, "Mr and Mrs Issei," *All Aboard* (Spring, 1944):15-18.
- 17) Mary Kyogoku, "Adult Education," *Trek* (February, 1943): 25-28.
- 18) 「読者の声」『トパーズ新聞 成人教育付録』, 1943 年 2 月 13 日。
- 19) スエモトのスクラップブックより。初出不明だが、1930 年代半ばから後半と推測される。Susan B. Richardson, introduction to *I Call to Remembrance: Toyo Suyemoto's Years of Internment* (New Brunswick: Rutgers University Press, 2007), xxiii-xxiv.
- 20) Toyo Suyemoto, "Hokku," *All Aboard* (April, 1944):17.
- 21) 例えば Stan Yogi, "Japanese American Literature" in *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, ed. King-Kok Cheung (New York: Cambridge University Press, 1997), 125-155.
- 22) Richardson, introduction to *I Call to Remembrance*, xxvii. 彼女は他にも短歌の形式 (五・七・五・七・七) を英詩の音節数に取り入れた作品も作っている。こうした特徴は、1910 年代に起こり俳句の要素も導入したイマジズムの影響もあるとは考えられるが、彼女の回想によると、やはり母からの影響力の方が大きいと考えられる。
- 23) 篠田, 「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動⑤トパーズ収容所」, 92: 『トパーズ新聞』, 1944 年 1 月 1 日。
- 24) 篠田左多江「望郷の総合雑誌—『ボストン文藝』」, 篠田左多江, 山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究』, 不二出版, 1998 年, 87-105.
- 25) トゥーリレイク収容所の概要については、篠田左多江「『鉄柵』—発展途上の帰米二世文学—」『日系アメリカ文学雑誌研究』, 54-69; Niiya, *Encyclopedia of Japanese American History*, 394-397; 白井昇「カリフォルニア日系人強制収容所」(河出書房新社, 1981); Weglin, *Years of Infamy*, chapter 8,9 などを参照。
- 26) Weglin, *Years of Infamy*, 154.
- 27) Niiya, *Encyclopedia of Japanese American History*, 395.
- 28) トゥーリレイク隔離収容所での混乱の実態に関しては多数の研究書があるが、ここでは Brian Hayashi, *Democratizing the Enemy: The Japanese American Internment* (Princeton: Princeton University Press, 2004); 篠田, 「『鉄柵』—発展途上の帰米二世文学—」; 篠田左多江「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動②トゥーリレイク収容所—」『東京家政大学研究紀要』第 29 集, 1989 年, 11-21; 白井, 『カリフォルニア日系人強制収容所』; 村川庸子, 桑井輝子『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究—日系アメリカ人の歴史の視点から—(トヨタ財団助成研究報告書)』(トヨタ財団, 1992) などを参照。
- 29) 1944 年 12 月 22 日から 46 年 4 月 18 日にかけて、司法長官は収容所内の 5,589 名について市民権放棄を承認し、そのなかの 5,461 名がトゥーリレイク収容所の居住者であったという。村川, 桑井, 『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究』, 30.
- 30) 『鉄柵』の創刊背景については、篠田, 「『鉄柵』—発展途上の帰米二世文学—」, 56-57; 篠田, 「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動②トゥーリレイク収容所」, 16-17; 野沢讓二「鉄柵の想ひ出」『南加文藝』創刊号, 4-20 を参照。

- 31) 加川文一「発刊の辞」『鉄柵』創刊号, 1944年3月, 1。
- 32) 「綴り方教室」『鉄柵』創刊号, 19。
- 33) 国民学校については、篠田, 「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動②トゥーリレイク収容所」, 13-14。
- 34) 松野薫「今の私」『鉄柵』第3号, 1944年7月, 42。以下引用は同頁より。
- 35) 市場美志恵「学校のひと時」『鉄柵』第2号, 1944年5月, 34。
- 36) 山城正雄『婦米二世—解体していく日本人—』(グロービュー社, 1984); 山城正雄『遠い対岸—ある婦米二世の回想—』(五月書房, 1995)。
- 37) 山城正雄「脱皮の期間」『鉄柵』第8号, 1945年4月, 9-10。
- 38) 山城正雄「『まぼろしの内容』を追いつづけて」『羅府新報』1973年5月29日。山城, 『遠い対岸』, 299頁に再録。
- 39) 山城正雄「火影」『鉄柵』第3号, 1944年7月, 32-33。
- 40) 山城は他に「徴兵」と題する詩を書いている。そこには、奇妙にも静かな収容所の情景が描かれているが、同時に、帰国願いを提出する人々が事務局に押し寄せたという描写もある。アメリカ人としての権利を踏みにじられ収容所生活を強いられているにも関わらず、アメリカのために命を捧げなければいけないという矛盾に憤り、堪えかねた者が、不忠誠を選んで日本帰国を申請したとすれば、この詩には徴兵実施に対する山城の批判や反発心が表現されているとも捉えられよう。山城正雄「徴兵」『鉄柵』, 第2号, 1944年5月, 24-25。
- 41) 廣小路敏雄「出発前夜」『鉄柵』第3号, 52-61。以下引用は当該頁より。

本論文は筆者の博士論文「日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて」(京都大学大学院人間・環境学研究科, 2012年1月)の第八章, 九章, および『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて』(風間書房, 2013)の第七章, 八章をバイリンガリズムの観点から加筆, 修正したものである。